火花

NO2

続々論文

四月全国政治闘争の高揚に向けて「拠点＝街頭」実力闘争＝反帝統一戦線を大衆的に創出せよ。

〈70年安保闘争の現段階とわれわれの任務〉

A、当面する情勢の特徴

東大闘争とその后の局面が明らかにしていることは①帝国主義権力の70年代への再編統合の姿が具体的に登場していることであり、②大衆の流動がその再編統合の秩序そのものに対する対決として噴激していることである。

東大闘争とそれに連続する全国大学占拠闘争の爆発が示している共通の性格は、「民主化」と「改良」をその出発点とし、又大衆が闘いに参加する直接の目標としながらも、対決する壁が帝国主義の秩序そのものであり、その秩序が、70年代への新たな再編の政治性を内包しているが故に、暴力対決を先行させねばならぬ闘争それ自体が反権力・反秩序へと直行している。そしてこれは又「大学解体」「入試阻止」の思想と「70年安保粉砕への現実化」という思想を結合させ、すぐれて全人民的な政治闘争へと深化しつつある。

それでは、いかなる大学占拠闘争が集中して表現しているその全体的な情勢の構造はどのようなものとしてあるだろうか。この情勢はまた、戦后階級闘争の転換と70年安保闘争の性格を明確にする条件でもある。

現在の局面は、一昨年羽田闘争以降の街頭実力闘争が、昨年一〇、二一闘争によって全人民的に拡大され、全面的な権力との対峙関係を形成した。その政治的質が、「資本制社会の再生産構造」それ自体の立脚点に波及し、それを拠点とした長期の闘いが展開されることによって、一挙に帝国主義権力の中枢神経にまでとどかさせる闘いがなされたことである。警察権力の全機能を動員した未曾有の弾圧、くり返し行なわれている大学への介入と捜査、政府による大学制度改編の策動、そしてあらゆる階層利害の行動を伴った顕在化、これらのことは闘いの深さが引き起こした事態である。この様な過程で帝国主義権力の70年代への意図と、他方で既存の議会主義運動の本質と進路、そして大衆的な方

解の特殊でまた明らかになっている。

ブルジョアジーの国民統合の現実が、今や「ブルジョア民主制議会」から「行政権力と警察」に移行するその過渡期の最終段階にあることを赤裸々にしている。これとの非和解的な対決が東大闘争であった。

この過渡期の権力の性格を見るために、次の点をおさえておかねばならない。それは、六〇年安保をメルクマールとする日本帝国主義権力の性格と形態である。

一国内での市場を主軸とし、直接的な侵略行動に関与することなく膨張をたどった六〇年迄の日本資本主義は、「憲法」を支柱とした戦后民主主義を利用しつつ、経済膨張の利潤の一部分を組織労働者へ還元し、流通過程の自立、地方行政、自治体の独自領域を保った構造の中で、「議会」を国民統合の中心としていた。

六〇年を契機とする日本資本主義の対外膨張開始と、六五年日韓条約による具体的な対外進出の強行は、それに見合って行政権力の肥大化による議会制民主主義の公然たる形ガイ化と警察権力の全面登場が具体的に開始した。安保闘争はかかる権力の性格を明るみに出したのである。また、戦后民主主義と平和主義による国民的な理念も、独自の平和提唱者の位置から、極東・アジアという具体的な領域の平和提唱者の位置へと移行され、それ故、平和は理念のみならず、政治の存在を介在させるものとなった。そして、組合主義的経済闘争と市民的統一戦線による平和闘争はその時点で崩壊した。

六〇年以后の過程が最も急速に資本と政府の一体化した「組織労働者」の生産点末端に至る組織化の過程であり、同時に権力の性格が行政警察と独占との一体化した体制への移行過程である。これは日韓論、日本帝国主義の東南アジア侵略と国際資本戦争との関連によって進行した。

こうした統合の過程は、戦后民主主義を議会と組合に幻想として設定しつつ、その実質は行政権力と治安暴力を進行させて資本の労働者支配へと形成したことであった。そうした中で議会、民主主義が表面から制度やその理念をブルジョアジーによって攻撃されることなく、ほぼ実質的な直接支配の内実を形成してきた。それ故、現在引き起こされている「民主主義」と「改良」をめぐる大衆的な噴激や、又、「民主主義」と法的権利をめぐる斗いは、確かに権力の全面的な壁の前に立つことによって、それをどう打ち破るかを展望する時、自づと権力との直接的な対決へと進む以外になく、しかも、その運動が「民主主義」と「法的権利」に立脚し続ける限り、実体において、ほぼ全社会的に理められた事態の中では大衆がその民主主義と法的権利を基盤にし得ず、斗いはその時点では展開し得ないのである。

いわば、現在の構造は、議会―民主主義―組合（法的権利）をもつ組織の時代から行政執行権力と全社会の末端に至る直接支配の網によって、しかもそれが不断に治安権力に一体化した事実によって貫徹される時代の過渡期なのである。しかも、この過渡期は、すでに実態が直接支配の段階にほぼ移行しているが故に、斗いもまた「民主主義」「法的権利」をめぐる対立を、ほんの一瞬のうちに通り越して直接的な暴力対決へと急激に進まざるを得ないのである。

ただこの過渡期がこのような力関係、既成事実の下に訪れた（斗争によって明るみにはした）が故に、今なお理念としての民主主義、法的権利、慣習を求める部分が、具体的な制度を含めて存在し、それ故「民主主義」を表明する反動の役割を荷っている。

いかなる時代のどのような斗いも、それが階級斗争である限り、「民主主義」と「法的権利」の正統性をめぐるものや、論争で決着づけられるものではなく、本質的に政治と力関係によってのみ成立する。

大衆の噴激が東大斗争あるいは十、二一斗争、更には羽田斗争后の過程で分解の中から生まれたことは、かかる背景が唯一大衆の日常性の末端を根底的に衝つものであり得たからである。

この過渡期はまた、日本帝国主義の現代世界における位置と、それがもたらす政治の特質、それ故それとの関係で成立している国内支配統合の方向と性格によって、その質を規定づけている。その質とは、海外侵略と反革命の対外政策と同質の物であり、軸は帝国主義軍隊の形成、海外派兵、国内再生産機構の再編成としてある。それ故その政策は帝国主義戦略の下に国民統合と社会秩序の再編を目指している。それは又、直接支配を通した戦時下、独裁体制へと向う金融ブルジョア、軍部、行政官僚の中央集権体制と排外主義への道である。

現在、日本帝国主義の排外主義への道は、思想的、物質的国家の直接支配下における組織労働者と切り離された労働者との対立を媒介に労働者の利害対立を煽動し形成しようとする道と一方に、他方には沖縄をめぐる日米関係の再編によって形成しようとする。これらの排外主義は朝鮮民族を重要な契機としながら、形成するであろう。

十、八以后の新たな実力斗争が、斗争自体として衝撃実力対決から労働占拠という段階に発展しつつも、根本的なところで、かかる日帝の戦略的な全体に対する対決と、その具体的なブルジョアジーと権力の立脚基盤の根底を解体する斗いとが結びつきはじめた所にある。そしてこのことは、十、八后オ一段階における「実力斗争」をめぐる論争が「暴力の是非」民主主義の有効性、市民社会の秩序」などを主要な軸としたのに対して、現在、東大斗争を主た段階では活動、諸階級の利害が自らの行動をもって主張せねばならぬ段階に入っている。それ故その運動の本質と又、権力の全体を明らかにした段階では、明らかに過渡期の特質に左右されるとはいえ、二極分解のいびれが安保斗争の大きさと、それ以上に巨大な戦后民主主義それを支えた物的基盤の解体は始まっている。斗争の評価をめぐる論争は、旧い運動と新しい運動との労働斗争を絡して、権力との段階を展開する現在から、更に斗いの内部での勝利の展望をめぐる、より激しい党派斗争へ、そして権力秩序の結合に対する二大対決へと進行することは不可避である。

沖縄斗争もまた、それ自身、沖縄のアメと現実が要求するが故に、全体的に戦斗的、ラジカルな実態をもつつも、斗いの深化が、二、四ゼネストによって中道政権＝統一戦線を、この階級斗争の冷厳な政治の舞台へと引き入れつつある。まさに事態は階級斗争の本質的な政治によって分解せざるを得ないのであり、それ故一切の斗いは、政治の本質との関係においてのみ、選択されねばならない。

日帝国主義権力の攻撃と有効な斗いの条件

すでに、現段階の情勢の特徴を明らかにした。それではこのような政治対決が、七〇年安保から七〇年代へのヌルジョアジーの攻撃に対して、いかに有効な斗いを形成することができるだろうか。これを明らかにするために、まず、日本帝国主義の七〇年代への方向を見通しておかなければならない。

日本帝国主義の七〇年代への道とは、その基本構造を、侵略、反革命、戦争遂行可能な国家体制を形成するところにおいている。それへの道は、何よりも東南アジア一体の経済、政治的統合、それを保障する日本帝国主義の軍事的、経済的力の形成である。それは、軍事的には核を含めた東南アジア統合と、対中国への優位を形成する軍事能力、したがって、海外派兵を含めた軍隊の行動の全能力の形成であり、他方、経済力は、後進国ヌルジョアジーの要請に応える物量提供の能力を持つことである。かかる日本帝国主義の対外戦略を実現するために国内の軍事、産業はもとより、そのような帝国主義戦略を承認する国家体制をそなえねばならない。これらを実現する道は、その物質力を、全くプロレタリアートの生産によってのみ可能であり、プロレタリアートの承認によって可能なのである。

これがプロレタリアートに承認されること自身が、最も矛盾の大きな問題であり、一方では、かかる戦略を支える国内政策のもとが農民を含めて、その犠牲を転嫁してきている。それは、こうした軍事基地に対する斗い、財政政策を含めた社会生活破壊においてのみ可能である。それらは運動の激化、大衆の貧窮発生的な噴激として表われている。問題なのは、その大衆の噴激が斗いの拠点をもって長期的な斗いを可能にし、しかも帝国主義の戦略を全体的に否定する革命的戦部隊に結合する時、階級との攻防はまさに真剣な斗いへと結合する。しかも大衆の民主主義、権利、利害改良の不断の日常的な不満、要求がヌルジョア秩序の巨大な壁に出合った場合、急速にそれとの対決へと進展せざるを得ず、にも拘らず、それがいかなる展望の下においてのみ実現可能であるのかは、明らかに政治権力=国家権力を誰が領有しているのかという、そのものを解体しつつ専制的な中央権力下に結合することが中心課題となる。それは合法的、良心的同意を促がすものではなく、暴力による制圧と排外主義による統合以外にはあり得ない。しかも、かかる予想は、既成事実として進行してきた全社会的な再編事実が、その全てを動員して、最後的な制度の解体へと向いつつある。

東大斗争は、従来の街頭における国家権力の暴力体系を明るみに出したとすれば、東大斗争は、その暴力の一層の激化と、他方での、その全社会的な統合の全体像を明らかにした。階級斗争の前進とは、そのような、いわば隠然たるヌルジョアジーの存在の体系を公然とさせ尽すことを抜きにはあり得ず、又同時にこのことは、かかるヌルジョアジー、国家権力の本質の前で、旧来の一切の運動の本質を根底から問うものに他ならない。

以上のような過程を通して、行政執行と国内統治がヌルジョアジーと、重都、警察と官僚による直接支配と、その下に吸合された、小ヌル中間層=秩序派との根底的な対決を生み出した。

こうした時代の代々の斗いの正解は、まさにヌルジョアジーの戦略を貫徹するその基盤を解体する斗いとして、従ってヌルジョアジーの提起する政治と対極する政治的な質において形成されねばならない。それは最も根本的な「生産点」を獲得するためにこそ、その生産点が不断にヌルジョアジーの下に吸合される必然性を断絶する斗いによって可能となる。その保証とは何か。それは我々の斗いの拠点が根本的にヌルジョアジーの正解点とは別のところで確立され、それを拠点として、対極する政治によって斗いは展開される。

我々は、これまで新たな時代の斗いを、全学連、反戦の共同斗争として街頭斗争によって形成し、現在では、大学占拠という段階に到達した。こうした段階及更に飛躍するのは、反戦の斗いが、工場占拠を確実のものとすることに他ならない。それらの条件は、地域労働運動、今や、斗いの構造は、次のように定式化されて理論と考えられるであろう。

地域政治斗争、労働運動を通して、大学を含めた斗いの中から「拠点」を形成し、その下で、新たな政治による結合=反帝統一戦線の実態を形成し、そこから街頭斗争=中央権力斗争を斗う前線を形成することである。これらが全国的に形成される中で、始めて、東大斗争における新たな斗いの型と質を全国化することができるだろう。

全国においては、軍事基地斗争の中で形成されたる矣他、政治情勢と矛盾の最も深化し、不断に噴出する地帯を拠点とし、他方、全学連、反戦との共同斗争の実績から一歩意識的な戦略で結合することにより、反帝統一戦線を形成せねばならない。

C、以上A、Bによる全体的な動向の中から特に二、三日の段階の特徴を鮮明にし、二の時期の集中的な任務を確定しなければならない。

東大斗争とそれ以後の全国大学斗争は、大学当局と いう戦術形態を通して、またそれと結合した相互斗争を通して、対权力斗争の質を深化させた。だが、東京都下を中心に全体として我動隊の物理力に圧倒され、一方では政府の制度再編の計画が進められ、事態は急速に反動化の方向をたどっている。しかも全国政治斗争がないとこのかり、大衆的蜂起を出発点としつつも、それらが更に一挙的に発展し得ない情況を生み出している。いわば、新たな政治攻防をめぐる対峙関係が形成されつつも、权力の側の治安と構造的な再編に対する斗いの側の長期体制（「挙国一致」実力斗争とその部隊の創出）の未形成という事態がその主要な焦点となっている。まさにこの課題は、斗争の総括の主要な内容であった。現在では、この課題に対して、斗争直后から、一歩進展した中で実践的方向を考えることができる。

それは学生運動を主軸としつつ「全学斗全国評議会」の形成が展望されており、地方この統一戦線への反戦の参加が学生運動の到達した政治的高さを基盤に実現へと進めることによって、ソヴィエト運動」の開始が可能となりつつある。

四月全国政治斗争／蜂起に向けて、現在の二、三月の「組織戦」の軸を、反帝統一戦線の大衆的基盤、物質的基盤の創出に設定することである。

D、地区反戦運動の主要な動向をここに誤差二点から

地区反戦の斗いは、現在、一方で学生運動と共に具体的な結合を進め、地方で地域政治斗争、地域労働運動を組合機関による運動とは別の地域統一戦線への方向で進めている。こうしたことが、政治闘争の物質的な基盤を保障斗争の進展と、ソヴィエト的合理化と結合した反戦への干部労働者の反帝統一戦線の拡大している。自然発生的なこれらの条件に対して、意識的に運動形成の方針を「労働運動の階級的形成」として対応しなければならない。われわれが反戦の新段階というのは、以上のような動向のなかでそれは問われているのであり、これもこの転換を促している条件が根本的には70年代への帝国主義の野制を軸に対する「权力」をめざす「ソヴィエト運動」の開始という意味で、戦術階級斗争の構造的転換を画するものである。

では反戦の転換はいかなる運動、組織の新しい展望によって具体化されねばならないのか。

それは第一に、反戦が闘っている運動の自覚的反戦のこれまでの第一の機能と自動基盤によってはどうしても得ない結合を生み出しており、それ故、二の部分の斗いはそれに見合う方針と組織が与えられねばならないことである。反戦斗争そのものが、ベトナム反戦から自国帝国主義打倒へと深化し、安保粉砕斗争の内実が权力打倒の具体性を要請される中で、反戦斗争一般ではこれを克服することが出来なくなっている。反戦の運動は、こうした新たな要請に実践的、至難的に応えつつも、それを論理化し、組織の機能と性格そのものについて再編するという作業は出来ていない。反戦が現在の運動論と組織によって合后の斗争の広がりと深まりを克服する限り、反戦それ自体の持っている政治的アイマイさと組織的アイマイさ故に、大衆の階級斗争への本格的な参加＝戦略を自覚した斗争への発展を狙いつつの中で押しとどめるものとならざるを得ない。したがって新しい領域への対応として青年同盟とその「全人民的な权力打倒、革命斗争」という政治の高から与えられなければならない。

第二に、以上のようなことの関係で、反戦青年委がより大衆的な統一戦線の位置を獲得しなければならないことである。それは反戦が大衆斗争機関としての多様な要求を備えるものとして回復されなければならないということであり、実力斗争派の新基盤としてある程度の要求的制約を克服せねばならない。むしろ青年同盟の形成によって、反戦のかかる位置の復帰が総体としての階級斗争の前進に利益をもたらすだろう。また、特に大阪における総評の「地区反戦、全学連」の追い出しの方向に対して、地区反戦が大衆組織、統一戦線機関としてのあらゆる条件を整えることによって、組織労働者の政治斗争への参加の条件を形成し、独自の機能の下に彼らを位置づけることが可能である。

以上のような転換は、単なる日常的な組織運営のかりかえだけでは成し遂げることはできず、反戦活動家自身がその意味を理解し、全地区にわたってそれを実践的に具体化する作業とその期間設定が必要である。

最後に確認しておかねばならないことは、学園闘争を提起した階級闘争の質と、それへの結合と共同闘争を持ってきた反戦の闘いの意味についてである。

それは、全人民的な政治闘争な「権力打倒闘争」「武装闘争」の時代へ踏み込む重要な契機を大学闘争が示し、それへの反戦の結合が、その闘いの質を生産点占拠へ波及させる条件につながっていることである。反戦活動家はその闘いの意味と経験を論理化する事によって、地域政治闘争と地域労働運動の結合を生産点占拠へと展望し、「拠点－街頭」実力闘争＝反帝統一戦線、というソウ・エトの物質的基盤を貫通し獲得のためである。

地区反戦の主要な組織課題、触媒、転換が要請している二の政治的課題と闘争の動態を獲得することに他ならず、これらこそが、現在の権力との対抗関係をさらに高次の闘争へ引きあげ、四月以降の全国政治闘争の爆発させ持続させる道である。三月、三月の任務は以上のことである。

E、当面の任務とスローガン

これまでに明らかにしてきたことの上にたって、二、三月の方針の内容は、次のように設定した。

① 二月二十三日から二十五日にわたる、京都、大阪、兵庫での「東大、日大、全国学園闘争勝利、学生、市民集会」（大阪－二十四日－六時、於阪大）への左翼的結集。

② 二十五日

「自衛隊三軍演習阻止、第一波術策粉砕闘争」

③ 三月三日

「全国大学入試阻止闘争」（学生の全国闘争）

④ 三月九日

「反戦活動家行動集会」

⑤ 三月十五日

「[illegible]」　機関紙

「この闘争を学園と[illegible]」　[illegible]実現し

⑦ 四月中旬の

「関西地区決起集会」かつ、四、二八闘争の爆発へと連続させねばならない。

政治過程は、六月の外相訪米・ASPAC会議－佐藤訪米へと展望されるが、我々は、当面の組織戦を通て、「拠点、街頭」実力闘争の型と、反帝統一戦線の基礎を形成しつつ、全国的に単一の戦略配置を可能とする運動　組織の質化をはかり、安保闘争の決戦期を勝利的に展望せねばならない。

☑ NATO、安保粉砕！

☑ 今秋、佐藤訪米阻止闘争に向けて、ソビエト運動の開始と全人民の組織された暴力を築きあげよ！

☑ 日米帝国主義打倒の渦の下、米、日、沖縄、アジアのプロレタリア人民の共同闘争を、四、六、十闘争の中で前進させよ！

☑ 帝国主義大学解体、権力の専制支配粉砕、全国大学占拠＝全共闘運動を発展させ、大学を安保粉砕－反帝統一戦線の拠点とせよ！

☑ マッセンストー地区ソビエトへの展望の下、工場占拠の物質力を、地域労働運動、政治闘争の推進で形成せよ！

☑ 二、三月の組織戦を「拠点、街頭」実力闘争＝反帝統一戦線を獲得する闘いとして貫徹せよ